

ダニエル書9章20-27節 「七十週による完成」

1A ガブリエルによる伝達 20-23

2A 民と聖なる都について 24-27

1B 六つの成就 24

1C 罪や背きの終焉

2C 義の確立

2B 七週と六十二週 25

1C 七週の中の再建

2C 六十二週の苦しみの時代

3B 六十二週の後 26

1C メシヤの断絶

2C 来るべき君主の民

4B 最後の一週

1C 多くの者との堅い契約

2C 半週の間荒らす忌むべき者

本文

私たちの学びは、午前に引き続き 9 章です。20 節から読んでいきます。ダニエルが祈りを捧げていましたが、その祈りの答えが明確に与えられます。それが「七十週」という期間です。この理解が、神が私たちに下さった救いのご計画を知るのに、極めて重要な啓示になります。

1A ガブリエルによる伝達 20-23

20 私がまだ語り、祈り、自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために、私の神、主の前に伏して願いをささげていたとき、21 すなわち、私がまだ祈って語っているとき、私が初めに幻の中で見たあの人、ガブリエルが、夕方のささげ物をささげるころ、すばやく飛んで来て、私に近づき、22 私に告げて言った。「ダニエルよ。私は今、あなたに悟りを受けるために出て来た。23 あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが述べられたので、私はそれを伝えに来た。あなたは、神に愛されている人だからだ。そのみことばを聞き分け、幻を悟れ。

ダニエルは、祈りを続けていました。自分の罪とイスラエルの罪の告白、それから神の聖なる山のために祈っています。エルサレムのことですが、ダニエルの切なる願いはダビデのそれと同じだったことでしょう、「詩篇 27:4 私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」ダニエル書 6 章を見ると、彼は日に三度、部屋の窓を開けてエルサレムに向かって祈っていました。

たが、このことを思っていたに違いありません。「主の前に伏して願いをささげていた」とありますから、荒布をまとい灰の中で座り込んで、そして伏して祈っていたのでしょう。

そして素晴らしいのは、「私がまだ祈って語っているとき」とあることです。祈りがまだ終わらないうちに、主が祈りの答えを与えられるのです。アブラハムの僕が、イサクの嫁のために祈りを捧げていると、祈り終わらないうちにリベカが水を汲みにやってきましたね。それだけ主がダニエルの祈りを親しく聞いておられたのです。「あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが述べられた」とガブリエルが言っていますから、その祈りがすぐに聞かれていることがわかります。10章においても、ダニエルが二十一日間の断食による祈りを捧げていると、「初めの日から、あなたのことばが聞かれているからだ。(12節)」とあります。使徒ヨハネが、御心にかなう祈りについて教えていますが、こう言いました。「1ヨハネ 5:14-15 何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるといふこと、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。」

そして、「私が初めに幻の中で見たあの人、ガブリエル」とあります。8章において、雄羊と雄山羊の幻、そして雄山羊の角からさらに出て来た小さな角、背きの罪を捧げるアンティオコス・エピファネスについての幻を見たダニエルに、その悟りを与えるために遣わされたのが、ガブリエルでした。そしてガブリエルはこれから、油注がれた者すなわちメシヤ、キリストが現れることもダニエルに告げます。このガブリエルが、バプテスマのヨハネの到来と、キリストご自身の到来を告げるため遣わされる使命を帯びるのです(ルカ 1:19,26)。「すばやく飛んで来て」とあります。興味深いことに、天使には翼があるものが多く出て来ます。ケルビムもセラフィムも翼がありました。黙示録には、四つの生き物が、翼が付いています。ガブリエルに付いているのか分かりませんが、付いていたと考えてもおかしくないでしょう。幻の中で、ギリシヤが翼をつけた豹として現れましたが、それは敏捷さをさらに加速させる姿でした。いずれにしても、ガブリエルは極めて敏捷に、ダニエルに主からの言葉を伝えることができたのだと思われます。天使は神に仕える霊ですから、空間を超えることもできるし、時間を超えることもできたのでしょうか。今は、紀元前 538 年ぐらいですが主がお生まれになる紀元前 4 年まで、彼にとっては大きな時間ではなかったかもしれません。

「夕方のささげ物をささげるところ」とありますが、これは日毎に祭壇に捧げる祭壇におけるいけにえです(出エジプト 29:38-39)。ダニエルは、聖所が荒れ果てているのを知りつつ、それが回復するのを願いながら、聖所におけるいけにえのことも意識していたのではないかと考えられます。その中で、ガブリエルがユダの民とエルサレムの聖所についての預言を伝えるのです。

そしてガブリエルが、こう言います。「あなたは、神に愛されている人だからだ。そのみことばを聞き分け、幻を悟れ。」ダニエルは、神によって人からも好意が寄せられていたような人でした。そして神ご自身がダニエルを愛しておられました。主の慈しみに信頼していた人ですし、何よりも神

の言葉をしっかりと学んで、その約束を信じて祈っていたのですから。そして愛されている人に対して、ご自分の計画について、ご自分のことについて隠さないでいられないのです。かつて神はアブラハムに対しても、それを行われました。ソドムを滅ぼすことを教えられる時です。「創世 18:17 わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」アブラハムもそうでしたが、愛されているからこそ、悟るのはとても辛い事実を知らなければいけません。イエス様が弟子たちに、終わりの日について苦しむことについて語られた時もそうです。愛されているからこそ、主が行なわなければいけないことが、多くの人にとって不都合な真実であっても語られるのです。

2A 民と聖なる都について 24-27

1B 六つの成就 24

24 あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている。それは、そむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し、至聖所に油をそそぐためである。

「あなたの民とあなたの聖なる都について」でありますから、ユダの民とエルサレムについてであります。ダニエルが祈っていたことそのものについて、期間が定められていると言っています。それが、「七十週」です。ここの「週」は、ヘブル語で「シャブオット」の複数「シャブイム」が使われています。七週の祭りの時にも使われている言葉です。これは「七十の七」ということになります。ダニエルは、エレミヤの預言によりエルサレムの荒廃が終わりまでの年数が七十年だと悟って、それでこれからエルサレムには神の国が建てられるのではないかと期待していたのだと思います。ところが主は、「七十の七の年です」と言われているのです。七十を七倍した年月ですから、490年であります。ペテロがイエス様に、「兄弟を何度赦せばよいですか、七度までですか？」と尋ねた時に、「七の七十倍」と言われたことを思い出します。途方もない回数をそのように言われたのですが、同じぐらいの衝撃をダニエルは受けたのではないのでしょうか。

しかしその七十週によって、主はダニエルが願っていたことをかたえられます。罪や背きを終わらせることについて三つ、そして義を確立することについて三つ教えておられます。

1C 罪や背きの終焉

罪を終わらせることについては、一つ目、「そむきをやめさせ」とあります。これは、背き、反逆のことです。この反逆を一切終わらせると仰っています。ダニエルは、先祖たちから続いていた背きについて、ずっと罪の告白をしていました。それを完全に終わらせるようにすると約束しておられます。

ユダヤ人がその背きを止めるのはいつなのでしょう？イエス様が再臨される時です。主が来られて、律法学者やパリサイ人と対立して、彼らがキリストにある神の権威に齒向かいました。そ

れでイエス様は、十字架に付けられる数日前に、八つの忌まわしいことを宣言されます。そして最後に、彼らが初めから終わりまでずっと神に逆らって来たことを糾弾されます。「マタイ 23:34-36 だから、わたしが預言者、知者、律法学者たちを遣わすと、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して行くのです。それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復があなたがたの上に来るためです。まことに、あなたがたに告げます。これらの報いはみな、この時代の上に来ます。」すなわち、紀元後 70 年ローマがエルサレムの町と神殿を破壊します。これまでの背きの罪が、彼らの時代に襲うということです。それから、こう言われます。「23:37-39 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」祝福あれ、主の御名によって来られる方というのは、メシヤ、キリストが来られることを歓迎している言葉です。このことをする時まで、イエス様を見ることはないということです。

次に、「罪を終わらせ」とあります。彼らの罪を主がいつ終わらせるのか？それは、その背きをやめさせて、彼らの内にある罪を取り除かれる時ですから、やはりキリストの再臨の時です。イエス様が戻って来られた時に、恵みと哀願の霊を注ぎ、それから罪と汚れを清めることをゼカリヤ書 12 章で教えています。「12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」そして、「13:1 その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。」それからパウロが、ローマ人への手紙 11 章でイザヤ書を引用して、イスラエルが救われる時のことを話しています。「11:26-27 こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」

そして、「咎を贖い」とあります。これは、贖罪のことであり、ユダヤ人は例年、贖罪の日にイスラエルの一年の罪を悔い改め、罪の赦しを大祭司が至聖所に入って血をふりかけることによって成し遂げます。その贖いは、新しい契約によって完成します。イエス様が言われました。「ルカ 22:20 この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」既に、咎の贖いその備えは与えられているのですが、これを彼らが自分たちのものとするのは、将来、主が再臨される時です。エレミヤ書 31 章に新しい契約の約束があり、イスラエルとユダの家に対して、「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。(31:34)」と言いました。

2C 義の確立

そして、主は義の確立を行われませんが、「永遠の義をもたらし」とあります。これはもちろん、主ご自身の義が永遠に堅く立つことであり、神の国にある正義の姿です。イエス様がお生まれになる預言をイザヤが行ないましたが、こう預言しました。「9:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」それから、「幻と預言とを確証し」とありますが、主が預言者に示された幻や預言が全てその通りであると確証を与える、すなわち成就するということです。聖書について書かれている預言が全てその通りになる時です。

それから、「至聖所に油をそそぐため」とあります。油を注ぐのですが、具体的には油注がれた方、メシヤが至聖所に入られるということでもあります。エゼキエル書 40 章以降を思い出せるでしょうか、主が建てられた神殿の幻があります。そこに東の門から主の栄光が戻ってきます。それは、オリーブ山に戻って来られる再臨の主が東の門から神殿に入られるからです。そして、木の机が聖所のところにあり、もはや香の壇はありません。そして、至聖所には契約の箱も、贖いの蓋もありません。なぜなら、そこでは王なるキリストご自身が着座され、礼拝を全て受けられるからです。それがここでの至聖所に、油を注ぐということでもあります。

このようにして見ていくと、私たち異邦人のキリスト者たちはいかに、ユダヤ人に約束された神の祝福をイエス・キリストにあって先んじて受けているのだということに気づいたかと思います。彼らの多くが、終わりの日、キリストの再臨の時にこれらの祝福を受けるのですが、私たちは既に、今受けています。そして 25 節以降、ガブリエルはどのようにして、七十週に至るのかを説明していきます。

2B 七週と六十二週 25

25 それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。

1C 七週のうちの再建

「知れ。悟れ。」とガブリエルは、注意喚起しています。ここには、頭をしっかりと使って理解しなければいけない内容が含まれています。初めに、七十週が始まる起点が「引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから」ということです。これがいつかという意見が、いくつかありますが、これからエルサレムに帰還しなさいと布告を出すのは、間もなくダリヨス王から代わって王となるクロスです。それで、大祭司ヨシュアと総督ゼルバベル率いるユダヤ人一行が、エルサレムに神殿を再建しに行きます。もう一つは、エルサレムの町再建のために、ペルシヤの王アルタシャスタが、総督ネヘミヤに対して、故郷に戻ってよいという許しを出しました(2 章)。その帰還によって、神殿

は建てられていたものの、城壁が崩れ落ちていたところを再建しました。時が、2章1節に「アルタシャスタ王の第二十年のニサンの月に、王の前に酒が出たとき・・・」とあります。町の再建ですから、この通達がここで言っている再建のことでしょう。そうすれば、学者によってその年月が若干異なりますが、ロバート・アンダーソン博士によれば、「紀元前445年3月14日」だということです。そして、ハロルド・ホーナー(Harold Hoehner)博士によれば、444年3月終わりから4月初めにかけてであります。

そして、ここの新改訳の訳が少し誤解を呼ぶものなので、口語訳を紹介します。「メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい。その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもって、建て直されるでしょう。」新改訳では、「七週」の後で文章が終わっているので、あたかも油注がれた方、キリストが七週、すなわち49年の後に来られるという意味になってしまいます。けれども、そうではなく、七週と六十二週があつて、すなわち六十九週、483年の後にキリストが来られると読むことができます。七週という49年間においては、「再び広場とほりが建て直される」というものが適用されるでしょう。49年の翌年がヨベルの年ですから、そういった意味で記念の年だと言えるでしょう。その間に、エルサレムの町は広場があるし、堀も建て直されています。

2C 六十二週の苦しみの時代

けれども、それは「苦しみの時代」と言っている中で何となく続いていくということです。それが六十二週のことです。434年間のことです。ペルシヤ時代においても、周囲の住民から敵視されましたし、ペルシヤからは重税を課せられており、決して楽とは言えませんでした。そして、ギリシヤの時代には、この前8章で読みましたように、アンティオコス・エピファネスの支配においては、とてつもない大試練でありました。そしてローマですが、ローマからも圧政で苦しめられました。

3B 六十二週の後 26

1C メシヤの断絶

26 その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない。やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。

そしてついに、驚くべきメシヤ預言が来ます。ユダヤ人にとって、そしてこれを聞いているダニエルにとって、自分たちのメシヤ、油注がれた者が六十二週の後断たれてしまうということです。メシヤを「ホサナ」と「救ってください」と言って歓喜している中で、皮肉なことが起こります。詩篇118篇ですが、その部分を読んでみます。「118:22-25 家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。ああ、主よ。どうぞ救ってください。ああ、主よ。どうぞ栄えさ

せてください。」ここの、「どうぞ救ってください」というのがホサナです。事実、ユダヤ人たちはメシヤとしてイエス様がエルサレムに入城されるのを喜んで迎え入れました。ところが、「家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。」とあるのです。神の家を建て上げるはずの、ユダヤ人宗教指導者らがイエス様を見捨ててしまいました。しかし、それこそが礎となり私たちに、霊の救い、永遠の救いをもたらすのです。

ここで、「油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない。」というのはそういうことです。イザヤもキリストを預言した時に、「しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。(53:8)」とあります。そして新改訳には出て来ませんが、「ただし自分のためにではありません。」と付け加えてあります。つまり、自分の罪と咎のためではなく、神の民の罪と咎のためであります。

この「油そそがれた者は断たれ」というのが、「その六十二週の後」ということで、先ほどの紀元前 445 年 3 月 14 日というのと、444 年というのを、一年 360 日でそれぞれの博士が計算しました。445 年 3 月 14 日から 483 年を一日 360 日として数えると、紀元後 32 年 4 月 6 日だそうです。そして、ルカによる福音書 3 章 1 節に、「皇帝テベリオの治世の第十五年」とあり、その時に主が公生涯を始められたことが分かると言います。紀元 28 年です。そしてイエス様が死なれるまでに合計四回の過越の祭りがありました。四回目の過越の祭りの日に主は死なれました。つまり紀元 32 年です。その年の過越の祭りは 4 月 11 日にあったとされ、五日戻すと 4 月 6 日の日曜日になります。このように、キリストがエルサレムに入城された日と完全に合致するというのです。あるいは、もう一人の博士の紀元前 444 年で計っても、紀元後 33 年 4 月 3 日ということで、やはりキリストがエルサレムに入城された日として妥当な時期です。

ですから、先ほど引用した詩篇 118 篇の言葉は、大きな意味を持ちます。「これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。」ということです。主が設けられた日というのは、主が公にメシヤ、キリストとして来られる日のことを言っています。主は、ゆえにご自分の時を意識しておられました。イエス様は、ご自分のことが時期尚早で広められることにはかなり神経を使っておられました。ご自身のことを話してはいけないと戒められました。そして少しずつ、葦を折ることのないような繊細さで、ご自身が神の子キリストであることを行ないで証しつつ、ピリポ・カイザリヤにおいては、弟子ペテロの口から、生ける神の御子キリストであるという告白をさせたのです。ヨハネの福音書には、「わたしの時」というのが何度も出て来て、カナの婚礼における「わたしの時はまだ来ていません。(2:4)」という言葉があります。ユダヤ人に捕えられそうになった時も、「イエスの時が、まだ来ていなかったからである。(7:30)」とあります。そして過越の祭りに近づいた時は、「人の子が栄光を受けるその時が来ました。(12:23)」と言われました。ですから、イエス様がエルサレムに入城される時は、子どもたちがホサナと叫んでいるので、律法学者が「彼らをしかってください」と言ったのに、「もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。(ルカ 20:40)」と言われました。

2C 来るべき君主の民

そして、非常に残念なことが起こります。「やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。」とあります。「やがて来たるべき君主」とは、ダニエル書 7 章で預言されていた、第四の獣から出て来る小さな角、大きくなって三つの角を折り、世界を牛耳る君主のことです。つまり、反キリストです。反キリストが復興ローマから出て来ます。その民でありますから、ローマのことです。紀元 70 年に、ローマ総督ティスがエルサレムを徹底的に破壊し、聖所も破壊しました。イエス様が、オリブ山で、「石がくずされずに、積まれたままで残ることは決してありません。(マルコ 13:2)」と言われた通りです。またマタイ 23 章の御言葉でも、「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。」とありました。ダニエルの期待とは大幅に反して、神殿は再建されるも再び破壊されてしまうのです。

その後が、奇妙です。「その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。」と言っています。七週また六十二週までは順当に来たのですが、ここの文を読む限り、「その終わりまで戦いが続いて」と終わりの日のことまで鑑みて、表現しています。つまり、六十二週の後というのは、かなり長い期間なのです。ちょうど時計があと五分で十二時になるのに、そこで止まってしまったような感じです。

「洪水が起こり」とありますが、ダニエル書 11 章 22 節に「洪水のような軍勢」という表現が使われており、軍隊が攻めて来ることを示しています。エルサレムは確かにそのようになりました。イエス様ご自身、「人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。(ルカ 21:24)」と言われていましたね。ローマがエルサレムを 70 年に破壊してから、ビザンチン、イスラム、十字軍、マルドゥク、オスマン・トルコ、英国委任統治と、長い、長い異邦人支配が続きました。ところが 1948 年にイスラエルが建国し、1967 年にイスラエル軍が、ヨルダン軍から東エルサレムを奪取した時、六日戦争の時に神殿の丘をイスラエルの主権の中に取り戻したのです。ですから、神の時間表にとって今がどれだけ微妙な時であるか理解していただけるかと思います。26 節に書かれていることが、既に終わっている状態なのです。次の 27 節を待つばかりになっているのです。

ここでとても大事なことがあります。その長い期間の時に、ここダニエル書では啓示されていないことが起こっていました。教会の誕生であります。異邦人もユダヤ人と同じように、キリストにあってイスラエルに与えられている祝福の霊的な部分に預かることができるということです。これを使徒たちは「奥義」と呼びました。「エペソ 3:5-6 この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。」これまで隠されていたので、旧約時代の預言者たちにも悟ることができていませんでした。けれども、使

徒たちには啓示されたのです。

そしてもう一つの奥義があります。この異邦人の救いというのも完成があり、終わりがあるということ。そして、これまで無関係のようだった存在、つまりイスラエルの民が救われるという計画です。「ローマ 11:25-26 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思えないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。」そこで次の節が近づいていることを知るので。



1

4B 最後の一週

1C 多くの者との堅い契約

27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」

神殿の回復を祈ったダニエルですが、その契約を固く結ぶ人物が現われます。それが先ほどの「来るべき君主」です。「多くの者」とは英語の定冠詞 the と同じヘブル語が付いていますので、ユダヤ人の多くの者ということです。けれども彼は、8章に出てきたアンティオコス・エピファネスと同じように、巧言を使い、人々を騙して、それで途中で約束を翻して、神殿を荒らしに荒らすことになるのです。多くのユダヤ人は、彼がメシヤであると信じて契約を結びます。けれども、なぜ騙されてしまうのでしょうか？それは、イエス様が既に語られていたことでした。「ヨハネ 5:43 わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。」他の人を受け入れてしまい

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E5%BE%A1%E4%BD%BF%E3%81%84%E3%82%AC%E3%83%96%E3%83%AA%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%81%8C%E5%91%8A%E3%81%92%E3%81%9F%E3%80%8C%E4%B8%83%E5%8D%81%E9%80%B1%E3%80%8D%E3%81%AE%E9%A0%90%E8%A8%80>

ます。イエスをメシヤとして受け入れなかったからです。神殿を再建することがその契約の中に含まれています。ですから、次に来る神殿は偽物の神殿であり、反キリストが聖所の中に入って自分を神と宣言するところの神殿なのです。

ところで、今のユダヤ教徒は、メシヤは神ではない、神の御子ではないと主張します。イエスは神の子であるご自身を主張したので、メシヤではないと言うのです。けれども、福音書には当時のユダヤ教がキリストが神の御子であることを教えていました。イザヤ 9 章 6 節、「ひとりのみどりご、ひとりの子」という言葉、そしてカヤパがイエスに対して、「あなたは神の子キリストなのか、どうか。」と尋問しているのです。ところが、そのように信じていません。モーセが、「私のようなもうひとりの預言者をあなたのために起こされる。(申命 18:15)」と言いました。そこから人間であるとします。「では、どうやってメシヤであると分かるのですか？」と尋ねるならば、「神殿を再建するのを導く」というのです。ですから、多くの者が彼をメシヤだと思って、それで神殿を建てられるということで契約を結んでしまいます。イスラエルにおいてユダヤ教の一派で、「神殿再建財団」というものがあります。彼らは着々と、今の神殿の丘、イスラム教の岩のドームのあるあの敷地に神殿を再建しよう、第三神殿を建てようとして準備しています。私たちはイスラエル旅行で、その財団の所に行きます。そこで、着実にそれらの神殿の用具を準備していて、実際にそれを使おうとしています。もしこれが可能となるのであれば、確かに彼らはその政治指導者をメシヤとして受け入れてしまう事でしょう。それで最後の第七十週目が始まり、七年間です。

ところで、教会は神の怒りが地上に下る時から救われます。ゆえに、主が天から降りてこられて、教会が空中にまで引き上げられる携挙は、この契約を結ぶことの前に起こっていることでしょう。

2C 半週の間荒らす忌むべき者

そして七年間は、前半の三年半と後半の三年半に分かれます。その半ばに大きな出来事が起こるからです。前半における再建された神殿の姿が、黙示録 11 章にあります。それは偽物であり、偽であることを預言する二人の証人が建てられます。その時のエルサレムは、「霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都(12:8)」とありますから、かなり霊的には低迷しているでしょう。ゆえに二人の証人は 1260 日、すなわち三年半預言するのですが、反キリストが底知れぬ所から現れて彼らを殺してしまうといえます。

そこで「半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。」とあります。アンティオコス・エピファネスがかつて行なったように、ユダヤ人のいけにえと供え物をやめさせます。そして自らが聖所にはいり、自分こそが神であると宣言します。そして、黙示録 13 章によるともう一人の獣がいて、その偽預言者がいろいろな奇跡を行ないながら人々を騙し、聖所の中には獣の像があり、物が言うことができるようになります。そして、獣を拝まないものは殺されるのです。この時に、7 章 25 節、「聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にくだねられる。」という言葉がその通りになります。

イエス様は、この時を大患難と呼ばれました。「マタイ 24:15-21 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。」

「荒らす忌むべき者が翼に現われる。」とありますが、彼が突如として現れるということです。彼は、不意に破滅をもたらします。そのように最も恐ろしい大患難が起こるのですが、しかしガブリエルの伝える神のご計画はそれで終わらないのです、慰めがあるのです。「ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」とあります。彼は破滅に定められているのです。偽キリストは、本物のキリストの到来の時に、生きたまま燃える火の中に投げ込まれると黙示 19 章の最後にあります。

最後に、その反キリストについてパウロが警告している部分を読みます。「2テサロニケ 2:7-10 不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。」不法の人は現れます、けれども今、引き止めているものがあります。聖霊の働きです。それが取り除かれる時がきます、それが教会の携挙であるのではないかと思われます。すると不法の人が現れて、多くの人を騙しますが、しかし、「主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。」ということです。ここに希望があるでしょう。前回も話しましたが、「苦しみは東の間」なのです。